

フィヒテ著『フリードリヒ・ニコライの
生涯と奇妙な意見』（1801年）(5)

勝 西 良 典

解題

以下に訳出するのは、ヨーハン・ゴトリープ・フィヒテ著、A・W・シュレーゲル編『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見。前世紀の文学史ならびに幕開けしたばかりの今世紀の教育学に関する論考』（*Friedrich Nicolai's Leben und Sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Litterargeschichte des Vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts*, 1801）の第10章から第12章である。底本には、アカデミー版全集（*J. G. Fichte — Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Reihe I, Bd. 7, hrsg. von Hans Gliwitzky und Reinhard Lauth, Stuttgart 1988. 以降, GA I/7 と略記）所収のテキストを用いた。訳文中の〔 〕は訳者による補足であり、訳文の欄外の数字はこの版のおおよその頁付けを示している。また、原注は章末に、訳注は脚注として示している。

ここで前回までの訂正を以下のようにさせていただきたい。

- ・『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第19号（2020年3月）、58頁6-7行目
 誤 …揺さぶる… → 正 …シャッフルして再編する…
- ・同紀要、第20号（2021年3月）、59頁、訳注22、下から5行目
 誤 …穴の空きたいす… → 正 …腰掛け式椅子様便器…

訳文

418 第10章 あの最高原則から当然の結果として生じた、我らが主人公の精神的性格の根本的特徴のひとつ

あらゆる精神的活動に際して、自分が優位だと誤って思い込んでいるために、自分が幅を利かせたり自分の優位を示す以外の目的を一切持たない者は、精神的活動のその他の可能な目的がどんなものであろうと、これに対する感覚を瞬く間にすべて完全に失ってしまうものだ。そういう者にとっては、研究や熟慮はすべて論争するための手段に過ぎず、更なる論争の一切切に終止符を打つ永続的真理を見つけ出すための手段とはけっしてなり得ない。このような真理は、今現に真実であるとともに変わることなく真実であり続けるので、そういう者にとっては身の毛のよだつようなものであり、彼はそうした真理を憎み、その理念に対して怒り狂う。なぜなら、そうした真理が見つければ、やはり当の彼もこの真理に服さねばならなくなり、これに対立することは何も言えなくなってしまふからである。

したがって、あらゆる積極的な永続的真理に対するこのよう憎しみは、今まで十二分に述べてきた原理に由来する我らが主人公の根本的特徴にちがいがなかった。彼が独立した永続的真理を万が一にも認めていたとすれば、それは逸話の真理ということになるが、彼が実際のところこのような真理を認めていたのかどうかすら疑わしいのである。この立場を越えているすべてのものにおいて、中でも特に哲学上のテーマと宗教上のテーマにおいて彼の目に留まっていたのは論争の対象だけであった。論争においてはどんな意見もそれ以外のあらゆる意見と同じ価値があり、そもそも感覚の鋭さを示すというやり方しかないということなのだろう。彼の格率はこうだった。「そのような諸対象にかんする最期の申し立てがあれば、それでよしということですと進んで行って、人間精神の唯一の真なる目的である論争が途絶えてしまうことがないように、こうした申し立てに対してはことごとく異論を唱えなければならない。

それゆえ、プロテスタンティズム、思想の自由、判断の自由は彼の不変のキーワードだった。彼のプロテスタンティズムとは、これすなわち、

現に真理であり続けようとする真理の一切切切に対する抗議であり、したがって、超感性的なものと信仰によって論争に終止符を打つ宗教の一切切切に異議申し立てを行うことであった。彼によれば、あらゆる平信徒をして、『[ドイツ]一般叢書』のメンバーのように、宗教的な対象についてあれこれと無条件に論争するが、厚い信仰心のうちに何かを捉えて放さず、このような信仰心でもってこれを扱うことがけっしてないようにさせること、これこそがまさに教会改革の目的であった。彼にあっては、あらゆる宗教は頭脳を教育して尽きることのない無駄話ができるようにするための手段に過ぎないのであり、けっしてこころや生活態度の問題ではなかったのだ。彼の思想の自由とは、あらゆる思考の結果[思考内容]からの解放、すなわち、空虚な思考の放縦で、内容も目標もないものであった。判断の自由とは、彼にあっては、すべての能なしと無学の者があらゆる事柄について、それについて何らかの理解があるうがなかろうが、自分が申し立てていることが斬られようか突かれようか[どんな攻撃を受けようか]、自分の判断を下す権利であった。だから彼は、イエーナの学術誌で自分の自然哲学関連の著作のひとつ^{訳注1}に対する無様な二本の書評を取り上げたときクレームをつけたシェリングに対して、あの有名な文書でこう問うていた。「この男には学識ある者の判断の自由という概念がまったくないのである^{訳注2}」。おそらくシェリングや彼と同類のものはみな、能なしはだれしも自分がこれまでにまったく学んだことがないと十分に心得ている事柄について手探りで探究するとか、うすのろはだれしも聞かれもしないのに答えようと口を開くといったような恥知らずの概念を持ち合わせ[など想像し]ていなかったのであろう。

419

^{訳注1} F. W. J. シェリング『自然哲学についての諸考察』(*Ideen zu einer Philosophie der Natur*, Leipzig 1797)。この件にかんするニコライの批評については以下の文献を参照。*Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, Bd. 56, S. 155 ff. Vgl. GA I/7, S. 419 Anm. 1. なお、*Neue allgemeine deutsche Bibliothek* (『新ドイツ百科叢書』)については、以降、NADBと略記する。

^{訳注2} Vgl. NADB, Bd. 56, S. 157. 「この男は学識ある者すべてに判断の自由があることが不可欠だということについてまったく理解していないのか。学術誌とはそういった自由な判断を集めたものとは別のものなのか」。Vgl. GA I/7, S. 419 Anm. 2.

こういうわけでニコライは、批判哲学及び観念論に対するのと同じように、教皇至上主義との論争のうちに人生を過ごした。なぜなら、彼はどちらに対しても同じ根拠に基づいて論争を繰り広げていたからである。その根拠とは、みずからの考えを強要することによって無制限の論争の自由いわゆるプロテスタンティズムやニコライ自身の既得の権威に不利益をもたらそうとする異他的な権威に対抗するというものである。彼は借り物の折衷主義の哲学と上手く折り合うことができた。この哲学は、あらゆる事柄についてあれこれと意見を持つが、その根本を究めたり、何かを完成したりすることは一切ないという彼のプロテスタンティズムの原理も備えていたのだ。しかしながら、最近の哲学は根本を究め、完成し、[是か非かを] 決定しようとした。時代に釈明させ、是か非かの決定をさせること、そして、それでよしという決着をつけることこそ、最近の哲学がまじめに取り組んでいたことだったのである。このような不当な要求は、我らが主人公には処罰に値する思い上がりだと思われた。独立した真理の存在をまじめに信じ、そうした真理の手がかりが掴めると確信できる者がいるということを、彼はただたんに想定していなかったのである。最も憎らしいと思っている敵対者さえ[彼ニコライのように] このような本末転倒なことができると信じていたとは、彼はやはりあまりにも寛大すぎた。だから彼は、あの哲学者たちが定立している諸命題のことは、たんなる意見に過ぎず、彼ら自身の良識に照らせばおそらく他の意見よりもましとは必ずしも言えないだろうと思しきものに過ぎないのであり、彼らがそうした意見を講じているときにまじめに、決定的な語調で言うなら、公衆に感銘を与えようとする努力に過ぎないのだ、とみなしていたらしいのだ。そういうわけで、彼は権威に対する非難の声を上げていたのである。[しかしながら、] 真理を自立的にみずから生み出す力のない者にとってもやはり、実際にはどこを見回しても権威しか存在しないのである。

420 第 11 章 我らが主人公の第一の根本的特徴と最高原則とから結果的に出てきた、その他の二、三の根本的特徴

ただたんに何かしら文句をつけて異論を唱えるためだけに他人の話を

聞いたり、その人の著作を読んだりしている人物がいる。そういう者には他にすることがまったくないので、異論の機会を見つけたあとに一瞬でも相手に話し続けさせてしまうことがあろうものなら後悔の念を抱くことになるだろう。そういった人物はつねに次の機会を逃さないものだ。しかしながら、こういった機会を、異論を唱えることだけが非常に重大な問題であるような者はみなつねに表層的に捕らえてしまう。そうした人間にとっては異論を唱えることだけが問題なので、このような表層を越えていく必要がまったくないのである。彼は表層をけっして越えないことが習性になっており、こうして絶対的な表層性と全面的な浅薄さという現象が彼の中で生じ、彼の自己とわかちがたく結びつく。これが我らが主人公の運命であった。とにかくある対象にかんしては彼を表層よりもほんの一層だけでも内側に向かわせるといったことはまったく不可能だったのである。

絶対的な表層とは脈絡のない剥き出しの事実そのものである。ニコライの能力が封じ込められたままになっている圏域は逸話と珍奇なものの圏域である。探究がその圏域に向けられていれば、それが彼にとっては心からの喜びであった。フリードリヒ二世^{訳注3}が亡くなって彼にかんする逸話がたくさん出てきたとき、彼にとってはどれほどうれしかったことだろう！そこは彼の専門領域で、論駁したり訂正したり補足したりすることがあった^{訳注4}のだから。

取るに足らない逸話をただたんに知っているということ自体が彼に

^{訳注3} フリードリヒ二世 (Friedrich II.), 1712年-1786年歿 (在位: 1740年-1786年); プロイセン王。

^{訳注4} ニコライ編『プロイセン王フリードリヒ二世と周辺の人物にかんする逸話——すでに印刷されている若干の逸話の訂正を添えて——』(Anekdoten vom König Friedrich II. von Preussen, und von einigen Personen, die um Ihn waren. Nebst Berichtigung einiger schon gedruckten Anekdoten, Sechs Hefte, Berlin und Stettin 1788-1792)。さらに、ニコライ『フリードリヒ大王にかんするリッター・フォン・ツィンマーマン氏の断章についての、数名のブランデンブルクの愛国者による率直な所見』(Freymüthige Anmerkungen über des Herrn Ritters von Zimmermann Fragmente über Friedrich den Großen von einigen brandenburgischen Patrioten, 2 Bde., Berlin und Stettin 1791/92)。Vgl. GA I/7, S. 420 Anm. 2.

としては目的であった。そのようなお粗末な知識によって彼は、あくまで彼の意見だが、人間が現に存在することの目的を果たしたのであり、真理に対する彼の無限の憧れを満たしたのである。このお粗末な知識がまれなものであればあるほど、この知識は彼にとってますます好ましいものとなった。なぜなら、そのとき彼は最もその知識をひけらかすことができたからであり、お粗末な知識でもこのようにまれな知識を持っていることは一種の徹底性であるが、この種の徹底性が唯一彼の精通しているものだったからである。ここから珍奇なもの、すなわち、聖職者のカラー^{訳注5}や鬘・仮髪^{訳注6}や最も軽い釣り針^{訳注7}を好む彼の傾向が出て

訳注 5 ニコライ『1781年におけるドイツ・スイス旅行記——学識、産業、宗教、風俗習慣にかんする所見を添えて——』[以下、『ドイツ・スイス旅行記』と略記]第11巻 (*Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahre 1781. Nebst Bemerkungen über Gelehrsamkeit, Industrie, Religion und Sitten*, 11. Band, Berlin und Stettin 1796, S. 84), 参照。Vgl. GA I/7, S. 420 Anm. 3.

訳注 6 ニコライ『古代及び現代における鬘の使用について——歴史的探究——』(*Über den Gebrauch der falschen Haare und Perrücken in alten und neuern Zeiten. Eine historische Untersuchung*, Berlin und Stettin 1801), 参照。Vgl. GA I/7, S. 394 Anm. 1, 420 Anm. 4.

訳注 7 『ドイツ・スイス旅行記』第11巻の「序文」(S. LXXXIV ff.), 参照。「私は、[...] まったくなじみがなく新しいと思われるものについて聞いたり読んだりした場合には、詳細を尋ねることにしている。なぜなら、伝えられている情報がどれほどなじみのないものだとしても、ときとして、割合根拠のある話ということもありうるからであり、何が真実か知るためには調査しなければならないからである。だから、こうした驚くほど小さい釣り針や魚でも私の目を引くのである。そういうわけで、私はオーストリアの二人の情報提供者宛に手紙を書いたが、返事がなかなか来なかったので、ウィーン在住のとても理解のある親切な人物を頼ることにしたところ、このたび彼のご厚意で、ヴァイトホーフェンで制作されたすべての鉄製品の価格表とともに、「この地には価格表に載っているものよりも小さい釣り針があるが、これらは美術品ではあるものの、実用品ではない」という暫定的な情報が手に入った。[中略] 私はこの件について芸術を解する人々と話し、私の働きかけで、さまざまな工場宛てに書簡がしたためられた。[中略] そうこうしているうちに、私は軍事顧問官兼税務顧問官のエヴァースマン氏のご厚意により、イーザーローン近郊のヴェーリンクハウゼンで[...] 実地調査を行い、美術品ということであれば、ヘルマ

くるのだった。——彼の研究精神を涵養したつまらないものをすべて数
421
え上げたいなどとだれが思うだろう。——彼が、それ自体は取るに足ら
ないように見えるこれらの個々の物を詳細に究明することが全体として
は何のために役立つのかということにかんしてごくごくわずかな予
感くらいは持ち合わせていたとか、このような逸話に染まった精神がこ
れまでにせめてきわめてあいまいではあるが物語の概念にまで高まるく
らいのことはあったなどということを示すほんのわずかの痕跡すら、彼
の著作には見当たらないのである。

彼だけに見えるこのような逸話という審判の場に、彼は念頭に浮かぶ
その他のものをすべて引っ張り出してきたが、その中には哲学すら含ま
れていた。彼によれば、この件はまさにこれで決着ということにする彼
なりの切り札がまさしく、過去の哲学者たちの箴言や意見にかんする逸
話を集めたものに他ならなかった。だから彼が他人の思弁を論駁するの
に用いるものも逸話、すなわち真実の物語ないし虚構の物語であった。
たとえば、ゼンプロニウス・グンディベルトとかいう作品は純粹理性批判
とかいうものを論破したのである。定言命法に対抗して、彼は何度も、人
生は定言命法に従うものではないことを思い起こさせたし^{訳注8}、最期の
時まで、これによってあの命法にとどめを刺したと信じていたのである。

これが絶対的な浅薄さであり、質料的と言ってよかろう。これと同じ
くらい我らが主人公とわかちがたく緊密に結びついており、同一の根本

ン氏が賞賛したヴァイト・ホーフエンの工場の釣り針の精巧さのレベルに
到達することはおろか、これを上回ることも可能なことを自分の目で確
認することができた。しかしながら、それは鋼線の釣り針であって鉄線
の釣り針ではないことに注意されたい。[中略] 見本は私の手にある。細
工の細かさは感嘆に値するものではあるが、同時に、吹けば飛ぶような小
さな釣り針で魚を釣ることができるなどと想像できる者がいれば、それ
がいかに嘲笑すべきことが見た目ではっきりとわかる」。Vgl. GA I/7,
S. 420 Anm. 5, 436 Anm. 10.

^{訳注8} たとえば、ニコライ『ドイツの哲学者、ゼンプロニウス・グンディベル
トの生涯と意見——最新ドイツ哲学の二編の資料を添えて——』（*Leben
und Meinungen Sempronius Gundibert's eines deutschen Philosophen.
Nebst zwey Urkunden der neuesten deutschen Philosophie*, Berlin und
Stettin 1798）、第6章（S. 81 ff.）を参照。Vgl. GA I/7, S. 421 Anm. 6.

的特徴に由来していたのが第二の、形式における浅薄さと呼びたい浅薄さであった。

他人の話や意見を遮って自分の異論をすぐに仕掛けることだけが重要であるような者にとっては、自分の念頭にまずはじめに浮かぶ思考内容なら何でも正しいのである。どのような思考の連関において他者は自分の意見を述べているのか、何に基づいてその人は自分の意見を証明しているのか、その人はこれまた同様にその意見に基づいて何を裏証したいのか、その人の意見はこのような先行と後続によってどのように規定されるのか、その人の意見はこのような規定に則って本来的にはどのように理解できるのか、といったことについてよく考えてみる時間がなく、おしなべて、異論を唱えるために聞いているだけであり昔からそうだったという者の場合には、そのような連関の概念に辿り着くことはけっしてないのだ。彼にあつては思考可能なものはすべて絶対的に〔彼と〕直接連関しているわけだが、それはどんなことに対してもどんな手段を使っても異論を唱えることができるからである。こうして、彼の場合は、すでに上で述べた体系、すなわち、直接的に確実な粒でできた大きな砂の山の体系^{訳注9}ができあがる。なぜなら、これこそまめまめしく異論を唱えるために一番役に立つものだからである。

だから、超越論的観念論の原理に対して、6匹ほどのチスイビル^{訳注10}やら豚のもも肉やら腰掛け式椅子様便器 (chaise percée^{訳注11}) といった

^{訳注9} 本書第6章の冒頭の段落（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第19号、2020年3月、52-53頁）、特にその後半部分と、同章末尾の段落の冒頭部分（同誌、58頁）を参照。

^{訳注10} クリストフ・フリードリヒ・ニコライ「さまざまな幻影からなる一なる現象の例——若干の概説的注釈を添えて——（1799年2月28日にベルリン王立科学アカデミーにて読み上げられた）」（„Beispiel einer Erscheinung mehrerer Phantasmen; nebst einigen erläuternden Anmerkungen. Vorgelesen in der K. Akademie der Wissenschaften zu Berlin, d. 28. Hornung 1799“, in: *Neue Berlinische Monatsschrift*, 1. Bd., Berlin und Stettin 1799, S. 321-360, besonders S. 359 f.）参照。本書第9章の訳注21（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第20号、2021年3月、59頁）参照。

^{訳注11} NADB, Bd. 56, Stück 1, S. 174 fg. Anm. 本書第9章の訳注22（『藤女子

物のうちのひとつがまずはじめに念頭に浮かぶとすぐにそれを持ち出して行く手を阻むことは我らが主人公にとっては簡単なことだった。そしてその際には、チスイビルや豚のもも肉といったものを避けるとあの体系はどのようになるのかということがわかるまで待つなどということはなかった。彼には、こういった抗議は本当に十分ふさわしいものであろうかという疑問がまったく生じなかったのである。一体どうしてこういった抗議がふさわしくないと言うのだろうか。彼はともかくこういった抗議をふさわしいものとしたのである。

このような絶対的な浅薄さがあればもうそれだけで、そこから、おおよそたんなる逸話よりも高いレベルにあったり、そうした高次のものの連関によって規定されたりしているすべてのものに対する歪みが生じるものだ。

しかしながら、浅薄さから当然の帰結として生じるこのような歪みに加えて、ニコライはもうひとつ別のものを芸術によって獲得し、習練によって後天的に身に着け、第二の本性とした。この点にかんしては事情はこうであった。異論を唱えるためだけに相手の話を傾聴する者にとっての主眼はつねに、相手がその中で物を示そうとする光の中で物を見ることにはない。なぜなら、そうすれば彼はその相手と意見が一致してしまうかも知れないからである。そうではなく、相手がその中で物を示そうとはしていない光の中で物を見ることに彼は注意を向けているのである。したがって、あらゆることを曲解し、彼の自然状態に基づいて整え、ひっくり返すことに眼目があるのだ。このような生業にしばしの間携わっていた者の視覚器官にとっては、歪んだ方向づけを絶えず与えられることによって、歪んだ方向を向いていることが自然になる。つまり、彼の目は意地の悪いものとなるのである。こうしてもはや彼は曲解したり歪んだ見方をしたりしようとあえて望むことはないだろう。彼にあってはすべてがおのずから本末転倒で、曲解されたかたちで表現されているのであり、ひっくり返った見方で描かれることになるのだ。我らが主人公はそんな状態にあったのであり、それゆえ、組み上げられた歪んだ

『大学キリスト教文化研究所紀要』第20号、2021年3月、59-60頁）参照。
Vgl. GA I/7, S. 421 Anm. 8.

像の集合，すなわち，彼のあらゆる見解の中に見られる歪んだものでできた歪んだものの歪んだ像の集合ができあがったのである。単純で彼にとって自然な歪みは，彼が物をその物の立脚点と思考の連関から引き剥がしたことである。第二の作為的な歪みは，彼が，このような状態であっても，物をさらにもう一度ないし数度ずらしたことである。たとえば彼がかかわっている哲学上の論争において，彼の同時代の他の人々のように，哲学的でない頭脳を持ち主のだれにとっても自然で，自分以外の哲学的でない頭脳を持ち主のだれに対しても容易に伝わる第一の単純な誤解で満足していたならば，厳しく批判されていた体系に対してはるかに納得のいく議論を提示できていたであろうということを彼に対して示すことができる。しかしながら，これは彼にとってあまりにも単純で，あまりにも新規さに欠けることであった。もっと多様かつ作為的に曲解しなければならなかったのだ。そういうわけで，彼はしばしば自分で自分の目的に反するような議論を立てたのである。——我々が主人公のこのような根本的な歪みが一例として描き出されているのを見ることは，あるいは読者を喜ばせることになるかも知れない。私たちの場合は最初に手に入ったものを選ぶ。

ニコライはあの有名な文書において自分の根拠に基づいてフィヒテの体系を吟味し，論駁しようとして試みている。この体系の内容に対して記録を取る立場から位置づけを与えるに際して，ニコライは何よりもまずどのように事を進めたと推定されるのだろうか。

423 さて，あの物書きが自分の哲学の原理を最も判明に述べていると主張している思弁的著作（たとえば、『知識学の基礎』^{訳注12}の第1節ないし『哲学ジャーナル』に掲載されたこの学問の新叙述の第1章^{訳注13}）をニコライが引用し，そこから逐語的に要約してこれを査定の底本としていたこ

^{訳注12} 『全知識学の基礎』のこと。

^{訳注13} 『知識学の叙述の試み』のこと。詳しい掲載情報は次のとおりである。*Philosophisches Journal einer Gesellschaft Teutscher Gelehrten*, 5. Band, 1. u. 4. Heft; 6. Band, 1. Heft; „Erstes Capitel“ 7. Band, 1. Heft. 1797. (GAI/4, S. 271 ff.) 本文で言及されている『哲学ジャーナル』とは，ドイツ語にもあるように、『ドイツ学術協会哲学ジャーナル』である。Vgl. GAI/7, S. 423 Anm. 10.

とはまちがないのだろうか。——見当外れだ！あの物書きの非常に多くの著作から脈絡なく集められた命題群から報告書^{訳注14}をでっち上げたのだ。——それでは、こういう事情でもあるので、ニコライは自分の仕事をするに当たって、少なくともこの人物の文字どおり厳密で学問的な著作群に制限するくらいのことはしていたのだろうか。——これまた見当外れだ！そうしていれば、単純な歪みで済んだことだろう。——あるいは、引用した箇所をその著者の通俗的著作から引っ張ってきたのだろうか。——それはまあ、無論のこと、どこかから持ってきたものではあろう。しかしながら、我らが主人公にとっては、それではまだ十分ではなかったのだろう。その著者の通俗的著作および学術的著作から、すなわち、「訴える^{訳注15}」、『人間の使命^{訳注16}』、『自然法論^{訳注17}』といった著作に含まれている脈絡のない文章群から、相互に隣り合っているだけのきわめて乱雑な混合物を形成するといったかたちで、彼の報告書をでっち上げたのである。そして彼は、だれもがこのようなやり方に対して含むところがあるといった可能性についてあまりにも鈍感なために、自分は、どの引用においても、「フィヒテ自身の言葉がそうになっている^{訳注18}」という文言を添え、該当頁を明記することによって、この上なくきちんと歴史的真理を監視しているのだと信じているといったありさまなのだ。

^{訳注14} NADB, Bd. 56, Stück 1, S. 171 fg. Vgl. GA I/7, S. 423 Anm. 11.

^{訳注15} 「ザクセン選帝侯の差し押さえ答書により自分に帰された無神論的見解にかんして公衆に訴える——差し押さえる前に一読することを求める文章——」(*Appellation an das Publikum über die durch ein Kurf. Sächs. Confiscationsrescript ihm beigemessenen atheistischen Aeußerungen. Eine Schrift, die man erst zu lesen bittet, ehe man sie confiscirt*, Jena, Leipzig und Tübingen 1799) のこと (GA I/5, S. 415 ff.)。

^{訳注16} 『人間の使命』(*Die Bestimmung des Menschen*, Berlin 1800) のこと (GA I/6, S. 187 ff.)。

^{訳注17} 『知識学の原理による自然法の基礎』(*Grundlage des Naturrechts nach den Principien der Wissenschaftslehre*, 2 Teile, Iena und Leipzig 1796 u. 1797) のこと (GA I/3, S. 311 ff. u. GA I/4, S. 3 ff.)。

^{訳注18} たとえば, NADB, Bd. 56, Stück 1, S. 173 の2つの注を参照。Vgl. GA I/7, S. 423 Anm. 15.

この体系の査定と論駁の方はどういう具合だろうか。——私たちは当て推量をさせることによって無駄に読者の気を揉ませるようなことはしたくない。査定と論駁がどういう具合になっているか言い当てることなど、まったくだれひとりとして、たとえ再び目覚めたオイディプスだったとしても不可能なことを重々承知しているのだから。我らが主人公はその体系が真理であり正しいことを完全に承認したかと思えば舌の根も乾かぬうちに再び否認するのである。そういったなかで、一体だれが歪みの度合いを言い当てたいなどと思うだろうか。[冗談ではなく] 実際にごういったありさまだったのである。彼はこのような意見を述べている。「自我は同時に主体でありかつ客体でもある。今やこのことは正しいのであり、また、意識の適切な記述となっているのだ^{訳注19}」。——本当にそうだろうか。このことが正しいければ、フィヒテがそれを絶対的の同一性を表す命題とみなしたのと同じように正しいのであり、したがって、この命題を次のようにひっくり返すこともできねばならないのだが。「主体と客体の同一性=自我、通常の表現に言い換えると、自我は完全に主体と客体の同一性に他ならない」。だとすれば、全体系が正しいことになる。なぜなら、この体系は徹頭徹尾、承認を受けた命題から完全に分析的に導出されたものに他ならないからである。

ところで、自分がここで認めたことを舌の根も乾かぬうちに再び撤回するために、ニコライは一体どのようなやり方で事に当たるのだろうか。この点についても私たちは、実際に何が起こるのか言い当てる読者はいないことを確信している。つまりは、これ以上ない劣悪なこととして、次のようなことが起こっているのだ。この哲学の本来の内容にかんする完全な証明が貫徹されていることのうちにまさにあの体系の本質が存するのであるが、ニコライはこのような内容を、この体系の大前提のひとつ、詳しく言うと、証明など一切無しに恣意的に持ち出された大前提だ

^{訳注19} NADB, Bd. 56, Stück 1, S. 171. 「フィヒテは私たちに、「きみがきみの自我について考えるなら、自我が客体であると同時に主体でもあることがわかるだろう」と言っている。——このことはとてもわかりやすく、また、私たちの意識の判明な説明となっている」[傍点大文字]。Vgl. GA I/7, S. 423 Anm. 16.

とみなしているのである。つまり、建造物自体のことを当の建造物の壁を築くための**鋸**だと捉え、大地のことを当の大地を支える**カメ**だと見ているのだ。というのは、彼はこんな意見を述べているからである。

「**自我は知性であり、知性は自我であるという命題は、たんに恣意的に設定された術語に過ぎない。すなわち、全超越論的觀念論が自己をそのもとに根拠づけているこの命題の証明に資するものは何も提示されていないのだ**」—— 訳注 20

そこには「**自己を根拠づけている**」と書かれている。なるほど、この点がどのように受け取られているのか疑問が残らないように、彼は比較の後の方でこう付け加えている。「人（すなわちニコライ）はあの命題に対してこのように反論する。「私の自我はたんなる知性ではなく、理性なり、感性なり、思考力なり、物的な力なりがこれに含まれているのだ」。そこには「**これに含まれているのだ**」と書かれている。訳注 21。

したがって、たんに恣意的な術語のもとで自己を根拠づけているだけで、何らかのものによって証明されていない、フィヒテの觀念論の大前提は、「自我ないし知性ないし理性、感性、思考力、物的な力は完全に

訳注 20 NADB, Bd. 56, Stück 1, S. 171-172. 「知性が自我であり、自我が知性であることは、新しい、まったく恣意的に設定された術語に他ならず、フィヒテ氏がこれをものの弾みで漏らしているのにもかかわらず、論争の余地のない、それだけで説明がつく哲学的命題であるかのように扱われているだけである。そこから彼はさらに推論によって自分の全觀念論を導き出しているが、しかしながらこのようなことはあくまで、最初に自我が知性に他ならないことが実証されてさえいれば、自由に帰結として導き出すことができたはずのものである。こうした諸命題を彼は自分の哲学のなかに恣意的に導入しているのであり、したがって無論のこと、自分の哲学のなかでこうした命題を見つけるのだ」[傍点大文字]。Vgl. GA I/7, S. 424 Anm. 17.

訳注 21 NADB, Bd. 56, Stück 1, S. 172. 「人は彼に対してこのように応酬する。「私の自我はたんなる純粋な知性ではなく、理性と感性、ならびに、思考力と物的な力がこれに含まれているのだ」[傍点大文字]。Vgl. GA I/7, S. 424 Anm. 18.

同一のものである」という命題ということになる。この命題に対してニコライが直接的に確実な命題として対置しているのが、「私の自我は他のものもあるなかで無論のこと知性でもある」という命題である（なぜなら、彼は、自我はたんなる知性ではないと言うことによって、自我はやはり同時に知性でもあると言っていることはまちがいないからである）。しかしながら、自我に含まれるものには知性以外にも、理性、感性、思考力、物体的な力があるのだ。このような対置を行うことによって今や彼は、あのフィヒテの大前提を廃棄し、それと同時に、全超越論的観念論の根拠は完全にこの大前提のみなので、全超越論的観念論も一緒に粉碎して雲散霧消させているのである。なぜなら、基礎がなくなれば基礎づけられたものもなくなる（cessante fundamento cessat fundatum）からである。

嘆くべきは、このような輝かしい議論をやり遂げたという意識のうちにその山師のようなキャリアに幕を下ろし、後裔がこのことで故人を偲べるようにすべく、ニコライがこのような論駁を締めくくった直後に絞首刑に処されることがなかった^{訳注22}ことである。何よりもまず、とても妙なことなのだが、反定立命題においては、知性以外にこれと並んでなお、理性、思考力、感性も（物的な力についてはここでは彼をお咎めなしにしてもよいだろう）列挙されていることである。ニコライは、プロイセンの陸軍の記述に心血を注いでいたとすれば、国王が陸軍以外に歩兵隊や軽騎兵团やラッパ部隊も保持していたというコメントを付けていたのだろうか。

さらには、ニコライは、いつもやっているように、自分の繰り出す反定立命題について、真理であることが自明であるかのように言い立てている。要するに彼はその命題を直接的意識の事実として持ち出しているのだ。ニコライにはやはり哲学系の友人はまったくいなかったのである。彼自身は、勝手に哲学関連の問題の裁判官を気取っていたにもかかわらず、もちろんこうした問題のことを知りえなかったことはおくとし、つまり、一定の場合において理性的に感受し、思考し、感覚的に知

^{訳注22} 「フェルディナント・ツヴェイコライ宛書簡」(GA II/6, S. 27-29), 参照。

Vgl. GA I/7, S. 425 Anm. 19.

覚し、感覚的に働きかけることは、おそらくたとえば事実と呼ぼうと思えば呼べるものだろうが、しかしながら、理性および感性および思考力ないし物理的な力の一切切を力として十把一絡げにして意識の事実と称することは、いつの時代においてもまったく批判精神に欠ける無学の者だけに許されうることなのだ、と言ってくれる者はいなかったのだ。

最後に、「自我は、どの程度まで主体-客体であろうとも、知性そのものであり、したがって、理性、思考力、意志能力、感性的直観、ないし物理的な力である」という命題はあの体系の大前提というようなものではなく、むしろこの体系そのものであった。そしてこの体系は、その全範囲においてもっばら次のことを示しているに過ぎないのだ。すなわち、こころの中にあるあれらの現れはすべて、相互に関係し合う〔一なる〕主体-客体性〔主観-客観性〕そのものがさまざまな仕方で屈折した結果に他ならないのである、と。この体系の敵対者のうちのあるものはこのような証明と推論に挑戦し、こうした証明や推論を打ち破るか、その間隙部分や不足部分を発見する努力をしなければならなかった。そんなことはせずに我らが主人公がしたように異論を唱えることは、まるで次のようなありさまであった。物理学者がやって来て、こう言う。「私にとって確定的なのは、あらゆる可能的な色は一本の無色の光線がさまざまな仕方で屈折した結果に他ならない、ということです。他のみなさんに対して、このことを一連の実験によって証明致しましょう。詳しく言うと、同一の無色の光線を一定の仕方でいろいろと屈折させることによってみなさん自身の目の前で次々とすべて別の色を発生させようというわけです」。すると、賤民の出自を持つあるものは、彼の実験に目を遣ることさえしないで、あっかんべーをしてその物理学者をからかい、こう叫ぶのだ。「馬鹿が考えることにゃあ、すべての雌牛は白いつてさ。いまだ知らぬというわけさ、黒い雌牛と斑の雌牛もいるってことを」。我らが主人公の視覚器官を通り抜けると、こんなふうにしてすべてのものが歪み、曲げられ、実におかしなものになってしまったのである。彼が生前咎め立てを受けることが非常に多かったのは、入手したものをことごとく悪意に満ちたやり方で曲解し、破廉恥な仕方で汚したことによるものだった。私たちはこうした弾劾に対して彼を弁護する。彼の手の内から出てくるものはすべて冒涇され曲解されていたことはまったくそのと

おりであるが、彼がそういったものを冒涇したいとか曲解したいと思っていたというのは当たらなかった。彼の場合、自然本性がもたらす特性によってそのようにしかなりようがなかったのである。スカンクが自分の撰取したものをすべて相手にダメージを与えるような仕方では悪臭に変えたからといって、あるいは、毒蛇がそうしたものを毒に変えたからといって、だれが弾劾したいと思うだろう。こういった獣たちはこの点にかんじてまったく無実なのである。ただ自分たちの自然本性に従っているまでのことなのだから。同じく、とにかく文学界のスカンクにして18世紀の毒蛇に分類されてしまっている我らが主人公が悪臭を周囲に放とうが毒をまき散らそうが、それは悪意からではなくて、ただたんに自分の定めによってそうさせられているだけのことだったのである。

427 第12章 どのような経緯で我らが主人公がこういった事情があるにもかかわらずそれでも同時代に対して若干の影響力を持つに至ったのか

あらゆる発言のあとに、私たちはフリードリヒ・ニコライのことを同時代で最も単純な人間だとみなしており、とにかく何でもいいから真つ当な意味で人間的なものが彼に備わっているとは思っていない、言語能力を除いては、と付け加えることが必要だと思っているとすれば、私たちは我らが読者の洞察力に大いに不信の念を置いていることになるだろう。

さて、彼が自分の患っているこのような大きな精神障害そのものについてまったく何も感じておらず、世にも単純な人間である彼がそのまま世にも利口な人間であるという意見を携えてこの世を去ったことには何の不思議もない。なぜなら、自分自身にかんするこのような意見も、何らかの異他的な判断によってこのようにまったく揺らぐことがないことも、彼の極端な愚かさそのものから結果として出てきたことだからであり、かなりの部分があまり愚かになっていない状況で自分が愚かであることを把握できていればよかったのだが、といったありさまだったのである。

しかしながら、彼は同時代の人々に影響を与えたのであり、なるほど

公に承認されているわけではないが、中立的な研究者が打ち明けているように、実際のところを言えば、彼の時代においてありきたりのことが支配的となった意見の体系の大部分が彼を出所とするものであった。こうした意見の体系については、いずれそのうちいずれかの付録でより詳細な報告を行うことにしよう^{原注}。

さて、自分自身の土地で自分自身の目で見ながらの方がこれらのものをすべてはるかに見事な仕方で生み出すことができたにもかかわらず、貧乏人が物乞いによって自分の財産を手に入れたり、単純な輩が愚かさによってみずからの知恵を手にしたたり、やぶにらみのものがまったく見えていないことによって見識を得たりといったようなことが、一体全体どのような経緯で起こったのだろうか。

人情に通じた人にとってみれば、我らが主人公がその極端な愚かさによって同時に、同時代の人々のなかで最も活動的で図抜けて恥知らずの者のひとりであったことさえ知っていれば、このような奇妙な現象は違和感を覚えるたぐいのものではない。彼は念頭に浮かぶすべてのものをためらわずにただちにあらゆる屋根に上って誰彼かまわず説き勧め、これを絶えず街の隅々まで人々の耳に届くように声を大にして触れ回った。そして何をもってしても彼を惑わせたり、彼の発言を揺るがせたりすることはまったくできなかった。自分で何かをする気がさらさらなく、あらゆる魂の力のなかでほとんど記憶だけしか授からなかった人々には、最終的にはあの知恵しか残らなかったのである。こういった人々は、これらすべてのことをだれから最初に聞いたのかとつくの昔に忘れてしまっており、かつてはそれを知っていたということをどうにかあいまいなかたちで思い出せるだけで、次第に、自分でそれを発見し、真実だと判断したのだなどと信じ込むようになるといった具合であった。あれらすべてのことは、確定的な真理にして事実という彼らの共通の財産に編入されたのだ。無論のこと、彼らが[覚えられるくらい]十分頻繁にそれを耳にしていたというのが事実であった。このようにして我らが主人公は同時代の思考様式の大部分の出所となったが、そのことでだれかが取り立てて彼に感謝するということは別になかったし、このような思考様式のそもそもの来歴がわかるということもなかったのである。しかしながら、彼はあれらすべてのことを知っていた。そして、彼がなん

だかんだ言っても大いなる功績を立てたのに、同時代の人々がけしからぬまでに感謝の意を示さなかったことが、非常に年を取ってからの彼の機嫌の悪さに大いに貢献したかも知れない。

イヌ^{訳注 23}であっても、話す能力と書く能力を身に着けさせ、ニコライばりの恥知らずぶりとニコライ並みの年齢を保証することさえできれば、我らが主人公と同じ仕事上の成果を上げることはまちがいない。最初は絶えずイヌの持つイヌの本性が気に入らないと思うかも知れないが、我らが主人公の持つニコライの本性を腹立たしく感じたのと同じである。このイヌの場合でも、気を狂わせられたり引っ込み思案にさせられたりしてさえいなければ、そして、同じことを再三再四繰り返してその発言に頑なに留まり続け、飽くことなく「やはり自分が正しいのであって、おそらく他のものがみな正しくないのだ」と叫んだり書いたりし続けてさえいれば、すなわち、この考えによっていまだにすっかり夢中にさせられていて、研究者としての研鑽を積んでいないただのイヌとしてこういったことを理解していることで、ニコライもまた研究者としての研鑽を積んでいない市民としてこういったことをすべて知っていることについてつねにそうだったように、鼻高々であるならば、ひよっとするこのイヌが非常に広範な影響力を手にすることはないのではないか、などと私たちが気に病むことはいささかもないだろう。このイヌの説いたことは時代を掴むだろう。そして、こうした諸論が我らがイヌに由来することがどうにかこうにか思い起こされるといったことすらないだろう。どんなスピッツでも『エミーリア・ガロッティ^{訳注 24}』とかいう作品の美について専門的に分析したり、『ヘルマンとドロテア^{訳注 25}』に見られる欠点を今はゴトフリート・メルケル^{訳注 26}にしかできないくらい見事

^{訳注 23} 『1797年版ミュエズ年鑑』(*Musenalmanach für das Jahr 1797*) 所載の『クセーニエン』(*Xenien*) Nr. 471 を参照。「「じゃかましい奴め! 何を吠えおる」、ご主人様、我ら二人のみ、ここで吠えおり。/スピッツ・ニコライ上席で、我末席にて職務をこなす」。Vgl. GA I/7, S. 428 Anm. 1.

^{訳注 24} レッシング『エミーリア・ガロッティ——五幕物の悲劇——』(*Emilia Galotti. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen*, Berlin 1772)。

^{訳注 25} ゲーテ『ヘルマンとドロテア』(*Hermann und Dorothea*, Berlin 1798)。

^{訳注 26} ベルリンの著述家である、ガルリープ・ヘルヴィヒ・メルケル (Garlieb

に立証したりできる美学が誕生することになるだろう。そして、聖書はいまだに残っているあらゆる迷信から浄化され、啓蒙されたプードルがわかりやすいと思って自分で書けたくらいだと言えるほどまでに解釈が進むことだろう。

原注

第3付録で行った『ドイツ叢書』の精神の性格描写を、読者は同時にこうした報告だと受け取ることができる。

(第1付録以降は次号以降に続く)

Hellwig Merkel, 1769-1850) のこと。メルケルはフィヒテのこのようなコメントに対して、『フラウエンツィマー宛書簡』(*Briefen an ein Frauenzimmer*, Berlin 1800 fg.) の第3巻, 537頁以下で次のように応答していた。「私はゴットフリート (Gottfried) ではありませんが、フィヒテ氏は私のことを語っていたのだと思われまます。また、どのような考えなのかについては十分ぼかして表現されていますが、きっと罵詈雑言を浴びせているのでしょう。したがって私は公に、私のことが気に入らないことをこの哲学者が公に表明してくれたことに感謝します。このような表明は、名誉なことに、私の頭が健康であることを証言してくれているのです」。Vgl. GA I/7, S. 428 Anm. 4.

